SONO HITO ライナーノーツ妄想
注：ど素人のライナーノーツ風妄想創作物であることを前提にお楽しみください

音楽という芸術ジャンルが築き上げられて以降、クラシック、ブルース、ジャズ、ロック、映画音楽、インストゥルメンタルなど、種々様々な音楽ジャンルの区別が打ち立てられて久しい。その個々別々の音楽ジャンルの内側で、ジャンル同士を横断し混合させながら、新たな作風と個性的な文彩を打ち立てることが音楽家の課題となっていくなか、音楽の起源を辿り直すかのように、文芸や演劇とが未分化なまま、虚構の抒情詩と歴史的叙述詩が渾然一体となった一つのパフォーミングアーツ作品を生み出したといって良い作品が本作、8th May「SONO HITO」である。

8th Mayは映画音楽などの分野で活躍し、妻の酒本麻衣（旧姓：向田）との音楽ユニットmaishintaとして活動している音楽家、酒本信太のソロプロジェクト名である。8th Mayとしての作品群の他に、現在はYoutubeなどでShinta Sakamoto名義での日々の即興ピアノ演奏（Today's Piano）や楽曲群、maishinta名義でリリースしたアルバムの楽曲のうちの一部、また8th May & IRIS SUN（酒本麻衣のソロプロジェクト名）名義の楽曲を聴くことができる。

8th May本人は本作「SONO HITO」を「歌物語」と形容しており、2021年現在、「SONO HITO」以外にも同様の形容を持つ楽曲「AOI HIKARI」が存在している。おそらくこれらの楽曲群に通底する特徴として、IRIS SUNとも行っている楽曲制作の方法論である「ワン・ストローク・スケッチ」、すなわち「一筆書き」によって制作されているということが挙げられる。

ワン・ストローク・スケッチとは文字通り、その都度、一回きりの即興的な歌唱と演奏によって一つの楽曲を制作する方法論であり、いわゆる即興演奏に近しい。ただ、事前に主題やコード進行を共有せず全くの白紙の状態で即興が始まる点で、既存のブルースやジャズのアドリブとは一線を画するものであり、歌詞とその歌唱の仕方（メロディ、ハーモニー）もまた即興で紡いでいく点で器楽での即興演奏とも異質である。付け加えるなら、一定のビートやトラックに乗せて即興でライムを踏んでいくヒップホップの手法とも、節回しを共有しながら特定の箇所だけ即興の歌詞で歌う民謡の方法論とも異なる。

筆者の印象では、このワン・ストローク・スケッチによる歌物語の制作は、一見底抜けに自由と映るフリージャズよりも、即興での歌詞の構想とその歌唱法による物語の叙述が伴う点で、楽曲の「自由度」と「完成度」がシビアに問われる方法論だ。なぜなら、その制作過程には上述したような既存の音楽ジャンルを超えて、物語を伝えるために楽曲の文

彩を選択できる「自由」が与えられているためである。さらに言えば、その歌物語において選択され紡ぎ合わされた楽音、歌詞、歌唱法それぞれが歌物語の主題と適合しているかどうかが、その「歌物語」全体の主題と比較され吟味されることを許すためだ。

この自由度と完成度を極限まで高められる条件を、制約条件として認識する音楽家の方が多いだろう。しかし8th Mayの「SONO HITO」のもつ自由度と完成度は、このワン・ストローク・スケッチの方法論でなければ結実し得なかったであろうレベルに達していると思われる。その証左は、楽曲全体の構成と個々の楽曲の文彩の多様さ、それによって本作が総体として獲得している主題の説得力と情景の喚起力にあると筆者は考える。

以下、アルバムの曲数を数え上げるときに通例の慣習として用いられているTrack（トラック）という磁気テープの本数＝曲数を数える言葉でなく、Scene（シーン）という演劇等で幕場を数える時に用いる言葉で綴られた、それぞれの歌物語の情景についての所感を加えていくことでその証左を明かしていきたい。

Scene

１．SHIKAKUI IRO

本作の導入を告げるScene 1 “SHIKAKUI IRO”は、映画音楽、インストゥルメンタルの文彩の強い、それゆえ現代の音楽文化に親しんだ人にとっておそらく耳に馴染みやすいであろうパッセージから始まる。次第に呟きのようだった言葉を通じて歌われていく歌詞から連想されていくのは、「四角い色した朝」――おそらくは窓の明かりの差し込む場面――から、光が至るところで反射し散らばりながらも確かな陰影の含みのある自然の情景の只中にいる自身を見出していく語り手「私」の存在だ。

木漏れ日のような音像を浴びつつ、小さな種から育ちゆく木々の根が静かに深く伸び広がるさまを味わい、森の広がる丘をたどり、清流のせせらぎから生命の移りゆきを感じながら山向こうを飛ぶ鳥たちを眺め、とある岸辺にたたずむ一人の「私」が、緑と青、黒と白に彩られた自然の様相に加え、水面に翻る魚、それを狙う雉鳩、岸辺の砂上にいるのだろう蟹や貝といった小さき存在を確かめていく。そしてこの一つ一つは小さくとも悠然とした自然の生命の存在感から、次第に「私」の連想はそうした自然のうちに存在していた「ひと」の過去へと向かっていく。五月雨に歌った誰かの歌、「故郷にわすれた子どもたちの童歌」が耳の奥でかすかに鳴り響く。そう告げた後に繰り返される主題からの穏やかな解放が、どこか次元の異なる、位相の異なる場所へと「私」が導かれていくような気にさせる。

この聴覚に端を発する記憶に投錨していく後に続いていた主題のリズムが、表題曲であるScene 2 “SONO HITO”の都節音階のような主題と響き合うことによって、導入として

の役目を果たしているところも聞き逃せない。また後述するように、楽曲のジャンルとしては非常に分類の困難であるこの楽曲が、以降の楽曲を聴くことのできる構えをじっくりと10分以上をかけて形作っている点でまさに導入であるとともに、Scene 5. と同様の文彩を持っていることによって、本作全体が円環的な構造を形作ることを可能にしていることも留意されて然るべきだろう。

いくらか結論を先取りして述べるなら、Scene 1から一貫して物語の流れが詩の紡がれるタイミングと楽曲の主題の変化・進行の喚起する情景を通じて謳われていくため、あたかもミュージカルか短編映画を見ているかのような感覚に陥るのだが、この感覚こそおそらく「歌物語」と8th Mayが形容した感覚なのだろう。

２．SONO HITO

本作のタイトルを冠した楽曲であるScene 2 “SONO HITO”は、全楽曲中最も謎めいた闇の香気を纏っていながら、光の予感も併せ持った楽曲であるといえる。都節音階の童歌の、どことなく不穏ながらあどけないパッセージから呟くように語り出されていく、川向こうから訪れたという「そのひと」と薄闇に浮かぶ「桜」の情景。「そのひとは……」という語りかけに、聴き手はかつてこの列島のどこかで生きた何者かの記憶のなかに醸成された夜の世界へと、ふと連れ出されたような感覚を覚える。一転、和風の色調は維持されながら、どことなくオルタナティブ、エレクトロニカに散見されるような不協和の香りの強い反復的なピアノのパッセージに移り変わると、琵琶法師の語りの如く低く唸る声音による歌唱法に切り替わり、「僕たち」と「君」、そして「男」の顛末が、虚構と過去の叙事とをないまぜにしながら語られていく。

歌詞が記されていないために物語の展開については多分に断片的かつ妄想的な連想になるが、名もなき兵士たちの声を掬い取る芭蕉の句を連想させるような草原の描写、『平家物語』のように人々の合戦を歌にしてきた法師たちを連想させるような白波たつ夜の沖合いに火の手のめぐる描写、またさまざまな絵巻や浮世絵を連想させる魑魅魍魎の殺し合いを描く男ににじりよる魂たちの声についての描写など、言の葉になりきらない声を「声」として写しとってきた鎮魂されるもの/鎮魂するものの描写がこの表題曲には埋め尽くされている。この意味で“SONO HITO”はこの楽曲を通じて、そして本作全体を通して、そのひとの想いを受け取り解放していく物語として読むことのできる、非常に能楽的な構成を持っていると解釈できるかもしれない。この解釈が許されるならば、「そのひと」とは能楽でシテ役が演じるような、語り手の前に現れる匿名的で幽玄な存在から、次第に神霊や怨霊などの霊的な存在――特にこの列島で起きてきたことを見つめてきた人物――へと変化していく人格的存在であるようにすら感じられる。

周知のように能楽の曲ではしばしば、ワキ役を務める僧などが偶然訪れた場所でたまたまとある人に出会い、その人の話を聴いていくとその人物が過去の著名な人物――特に非業の死を遂げた人物として著名な人物――であることがわかり、その人物の怨念や願いを僧侶が聞き届けることによって成仏していくまでを描いていく。“SONO HITO”の後半においてもまた、「そのひと」が「あのひと」として、つまり過去に確かに存在していた人物として語り直される（＝その思いが聞き届けられる）に至るとき、「そのひと」の存在が光のなかへ解放されていくような展開を見せる。

３．Release Your Butterfly

この楽曲は見事にScene 2からそれ以降の楽曲への橋渡しをする、いわば蝶番のような楽曲として構成されている。Scene 2のラストから地続きに展開する冒頭部の都節音階風の白い色調の印象を持つパッセージから、次第に光に満ち溢れた空間を構築していくような、穏やかなピアノロック調のコード進行へと実に自然に移行するところはぜひ聴いてほしい。この光に包まれた空間のなかで端的に示される隠喩的なメッセージが、このScene 3のタイトルともなっている“Release your butterfly / From your heart”である。

一聴して、天国への階段を登り終え天国の扉を叩き終えた誰かを幻視しそうな、英米ロックのなかで確実に育まれてきた英語詩の繊細で現代的な感受性を引き受けたパッセージとメッセージがリフレイン気味に展開されていることに気付かされる。それでいながら、Scene 2での怨念と不合理に満ちた状況を引き受けているため、ここで語られる「君（たち）の蝶を解き放て／君（たち）の心から」という言葉が単なるポジティブなメッセージに終始し得ない主張を持つことに成功している。

君（たち）の心から、君（たち）の蝶を解き放てという言葉が隠喩的に示している事態そのものはさまざまな解釈に開かれている。しかし筆者としては、「蝶」という存在が夢の中にいる人の姿、転じて死者の魂、あるいは死者の転生した姿の隠喩としてしばしばアジアの文芸作品のなかで語られてきたことを想起せずにはおれない。加えて筆者が指摘しておきたいこととしては、このScene 3で語られる言葉が「そのひと」から聴き手に語りかけられているのではないかという解釈によって見えてくる情景の豊かさがある。

能楽でもしばしば、魂を鎮められた霊的な存在は光の中に転じた末、その存在にとって自覚されてきたこの世界の情景を、現世に生きる私たちへのメッセージとして伝えてくることがある。「そのひと」が「あのひと」へと転じた末にその人物にとって自覚されてきた情景がこのScene 3で展開される光の空間であり、その空間から発された言葉がこの楽曲のタイトルだとするなら、この命令形の命題の意味するところは「心の中にある死者の魂を解き放とう（＝自由にしよう）」という主張なのではないかと筆者は推測する。なぜな

ら「そのひと」こそが、さまざまな鎮められることなく存在してきた死者の魂を抱えてきた存在であったように、筆者には思われるからだ。

このScene 3の最後に響いてくるリフレインは、“Make the world”という言葉で締め括られている。この文章を完成した一文とみなすか、“the world”の後に形容詞が付け加えられるはずであったがそれをあえて省略した一文とみなすか。後者の場合、その形容詞に何を選ぶかは私たち現世を生きるものが選ぶことであるという暗黙のメッセージもまた、そこに読み込むことができるだろう。双方の解釈の可能性があることはもちろんだが、その双方の意味をこの二つの単語のシンプルなリフレインに込めているように、筆者には感じられる。

４．Fountain

直訳して「泉」という意味を持つScene 4 “Fountain”は、まるで古典的なピアノ組曲のような導入から、不意に語り出されていく「見つめて／見つけて」「僕はここにいる」という、成人した意識のなかに存在している子どもが自分の存在を見出してくれるよう懇願するような日本語詞の歌唱に伴い、次第にミュージカル調の歌唱法の展開へとつながっていく、全楽曲中で歌唱そのものが肯定的で強靭なメッセージを持っている楽曲であるように感じられる。

その歌唱が最も強く打ち出されるのは、上述の日本語詞とほぼ同義の英語詞が語られたのち、“I used to be a child / I used to be a new born child”という言葉が――おそらく即興的な「発見」によって――感情とともに溢れでてリフレインをしていくパッセージ以降である。この、自分がかつては一人の小さな子ども、一人の新しく生まれた子どもであったという自覚の深まりが、ともにこの自然の事象を経験し、確かにその味わいを体験してきた存在として「僕」と「君」、「僕たち」がいるという洞察を導いている。言い換えれば、誰しもがこの自然の中に新しく生まれ出で、水を飲み、山々から流れてきた川を味わい、野を駆け巡り、めぐる季節の中で泉のように溢れ出る生命を味わってきた存在としてひとしい存在なのだという洞察を導いている。

ここに至って、不条理と不合理に満ちた生死の境を超えてきた「そのひと」という幽玄的な存在の視点から、その人間がどのような人生を送ることになろうとも、ひとしく生命のゆりかごの中で目覚め眠る新生児として生まれいでたことを讃える洞察が提起されているといったら、言い過ぎであろうか。しかし仮にこの洞察が正しいなら、この絶えざる新生児の出生の流れ、そしてこの出生を揺籃する生命の流れの源を、この楽曲は「泉」という隠喩で呈示しているのではないかという解釈も可能だろう。

空想に空想を重ねるような愚を犯していることを承知でより踏み込んだ解釈をするなら、この「泉」から生まれ出でた存在として全ての生命をひとしく讃えることにより、「そのひと」という匿名的な存在者の魂とその存在者が見つめ抱えてきた多くの不遇の存在者の魂とは、根本から救われていることになる。なぜならここで提示されている死生観（と筆者が読み込んだもの）においては、いかに死んだか（いかに生きたか）によってその生を讃えるのでなく、生命の流れのなかで一つの生命として誕生したことそのものを肯定する視点であると考えられるためだ。しかし本作は、この誕生肯定の視点を呈示することでは終わらない。聴き手たちは事実として不合理で不条理の現実を生きているためだ。

５．Stand between Shadows and Light

光に満ち溢れた場所の残り香を湛えたような、Scene 1と同様の映画音楽やインストゥルメンタルの文彩の強い明るさのある導入部から、次第に陰りのある展開部へと移行するなかで物語の舞台は「複数形の影」（Shadows）を伴う日常へと回帰していくように感じられる。「そのひと」が見つめてきた不合理や不条理は、現実的には常にすでに「泉」とともにある。しかしそこで「現実」に適応すべく「影」に同化してはならないということを、数ある児童文学や神話は教えてきたのではなかっただろうか。

結論から言えば本作のラストを飾るScene 5は、内心の平和を謳う歌謡から、次第に外界をも含めた平和を希求する讃美歌へと進展していくように思われる。

まず語り部は、光と影の色彩を湛える音像に取り巻かれながら、この楽曲の表題にあるように“I stand between shadows and light”と語り出す。つまり、光と影の間（あわい）に立つことを選択する。この選択を単なる折衷案と捉えることは容易いが、むしろその間に立つという態度は、影を眼差しながら光を忘れることなく、光を浴びながら影を想うという精神の緊張関係を絶えず維持し持続させることによってのみ可能となる厳しい態度として理解されるべきであろう。この態度を保てばこそ、陽と泉の出会うところに展開される色彩が、虹へと変化する場所に立つことができるのだろう。

この解釈に立った上で“Cast your faith”と繰り返す語り部の言葉の意図を汲むならば、複数の影の取り巻く現実のなかでこの光と影の緊張関係の只中においてのみ意味を持つ心のあり様を保持するには、逆説的ながら、君の心のあり様を内に閉じ込めるのでなく、外界の影に自らの心の中にある光を投げかけると同時に、外界の強い光で見えなくなっている人々の心の中にある複数の陰を見つめるべく、自身の心を投げかけていくことが必要なのだという実存的な提言として受け取ることができるだろう。言い換えれば、内なる光によって外界の影を拭い去ると同時に、外界の陽によって見えなくなってしまっている陰を内なる心の影によって探り当てるということだ。

影の取り囲まれた場所に光を分け与え、影の中に存在する光を見出していく一方で、光の中に存在する影――傲慢、差別、偏見――に気づきその光を和らげていく心からの配慮がなければ、実際に双方の間に立つことはできない。なぜ双方の間に立たねばならないかといえば、“SONO HITO”で語られたような殺し合いの螺旋、そして元は新生児であったはずの怨霊たちの群れを生み出さないためであろう。この仮定が正しければ、これまでの楽曲群が鎮魂を志向する歌であったのに対し、Scene 5は先んじてそのような不合理や不条理を治癒することを志向する歌だということになる。

そして物語は一層輻輳的な様相を呈していく。筆者が聞き取った限りでは、教会の中で揺れる蝋燭を幻視するかのような静謐な音像とともに、まるで聖人を讃えるかのように“You stand between shadows and light”と歌われる。天使は空を飛び、 “Your Sisters”は“pray of forever”（永遠の祈り）を捧げ、何者かが運んできた巨大な手によって置かれた「石」（stones）に、君とそのシスターたちが触れたと語られる。そして“Sky is decent/on your head”（空は、確かなものとしてある／君の頭上に）と告げ、本作は綴じられる。

教会音楽とは異なる音像ではありつつ、ここで語られる“You”の位置付けは筆者にとって謎の多いものであった。しかしこの“You”をScene 4 “Fountain”で語られた「君」と同一人物だと捉え、この楽曲が不合理や不条理を治癒する志向性を持っているという仮定を置くならば、ここで語られている「君」はイエス・キリストのような宗教者ではなく、語り手の「僕」とともに自然を味わい、女性たちとともに祈りを捧げながら、巨大な手によって置かれた石に働きかけ、光と闇の間に立つことを志向している「君」のことであろうと考えられる。その「君」が具体的に誰であるかは最後まで明らかにされることはない。しかし現実の空の元で、理想的な光と不合理な闇の間に立ち続けようとする人間への讃美であるとは、少なくとも解釈することができるだろう。

そのような覚悟を持って現実に生きる人間たちは過去に遡っても稀有であることに鑑みつつ、しかし聴き手の一人として筆者は、人間酒本信太とそのパートナーである酒本（向田）麻衣の二人と、特に彼女のネパールでの取り組みに関わってきた女性たちの存在を想起せずにはおれない。

アーティストのプライベートにも関わるような、このような空想は許されるものではないかもしれないが、数ある人々の手によって人為的に堆積されてきた巨大な社会課題の塊にともに触れながら、女性の尊厳という光を守るべく働きかけてきた彼女もまたその「君」の一人なのではないか。すると「僕」は、彼女の頭上に確かに存在しているものと同じ名前を宿した一人の人間の出生を予感的に、先んじて寿いでいたのかもしれない。

最後に

コンテンポラリー・アートに親しんでいる方の中には、ワン・ストローク・スケッチの方法論にシュルレアリスムのオートマティスム（自動筆記）との近しさを感じている読者もおられるだろう。製作者の意識の枷を外し、ペンを一度紙につけたら離すことなく、手が勝手に動き出しているかのように言葉を紡ぎ、無意識的な思考へと投錨することを試みる方法論である。

筆者も当初はその意識を持ってワン・ストローク・スケッチの方法論で製作された楽曲群を聴いていたが、むしろこの「SONO HITO」を聴いて以降、楽曲全体を構成している方法論状の原理はすでに記述したように能楽のそれに近いと考えを改めた。

意識と無意識の中に自閉するのでなく、夢と現の間にたたずむ「私」が、過去の記憶とないまぜになった虚構の情景を背負う何者かと出会うのである。この原理が 8th May によって適用されるにあたって、冒頭に述べたようなさまざまな音楽のジャンルをパッセージごとに飛び越えていくような自由度を持ち、かつ全体の構成としての完成度も高い楽曲群が生起し得たことは、言わずもがな彼自身がこれまで蓄積し記憶し親しんできた音像の豊かさ、そしてその多種多様な音像の豊かさを身体感覚にまで馴染ませることのできる精神性に由来するものであることは論を俟たないだろう。

IRIS SUN との共同制作によるワン・ストローク・スケッチ、また maishinta としての親しみやすい楽曲群に加え、今後の歌物語の制作が楽しみになるほかない、一作である。